

## 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

### 報告書資料 復興支援 - 12

学校名・団体名	いわき市立中央台東小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	自然に学び豊かな心を育む環境教育

#### 活動・実施計画

##### 1. 実施計画に至るまでの経緯 自然環境教育～自然と触れ合う体験活動の重要性

本校は、いわき市中央部の丘陵地帯を造成してできたいわきニュータウンに位置する創立15年目の学校である。他校に比して医師や教職公務員等の割合が高く、教育熱心な保護者が多い。本校児童は読書を好み、知識が豊かで学力も総じて高い。地域にある県立公園や自然公園を活用しての科学的な探究活動により、創立当初は理科教育やエネルギー教育等最先端の科学教育を行う学校として多くの教員が授業研修のために訪れた学校であった。しかし、東日本大震災以降は公園等の放射線の値が高く、7年たった今でも、公園や生息する小動物の放射線量を心配する声が絶えず採取活動は自粛、遠足等で公園を利用する際にももって線量計で測定し保護者に安全であることを周知しないと実施できないのが実情である。震災以降は原発事故避難者の仮設住宅が学校周辺に立ち並び、現在も43名の被災児童が本校に在籍している。このような状態が7年も続いているせいか、児童は知識が先行し感動が少ない傾向が見られ、これらは震災以降の自然体験自粛による直接体験の少なさと大いに関連があると考えている。このような状況だからこそ、あえて児童に生き物とのふれ合い体験を行わなければならないと考え、まず3年生にカブトムシを一人一匹ずつの幼虫飼育にチャレンジさせることにした。果たして児童はカブトムシの幼虫を手にとることはできるのか、怖がって活動できないのではないのか、保護者からのクレームが寄せられるのではないかなど様々な懸念があったが、実践すると予想を超えて児童は幼虫の様子に嬉々として歓声をあげ、もぐる様子をじっと観察していた。HPにも子どもたちの笑顔や喜ぶ表情を掲載するとアクセス件数が急増、保護者からも家庭で話題にしているとの声が寄せられた。図書室に置いてあるカブトムシ関連の図書は全て3年生の児童が借り切り、自分の本物のカブトムシの幼虫と照らしながら観察をしている。やはり本物の持つインパクトはすばらしい。子どもたちに驚きと感動を呼び起こし、研究意欲をさらに高めてくれた。今後、児童による自然環境関連の研究が多くなされるに違いない。

そこで、この実践を全学年に広め、学校全体に喜びと感動のある活気あふれる学校にしたいと考えた。そのためには、放射線教育の充実を図りつつ、今年度飼育する小動物を放射線の心配のない県外産のものや、もしくは県内産でも放射線測定値が基準以下の小動物を教材として活用することが必要である。

また、小動物は一人一人が「自分の」小動物という意識をもつために、一人一匹か雌雄つがいで飼育観察実験を行う。「自分の」という意識をもつとみんな熱心に関わり、愛情をもって細かく観察するようになるからである。これらの活動の重要性については、貴財団情報誌「えるふ Vol.10」P15.16でも私の前任校の実践として紹介させていただいている。

さらに、助成対象ではないが緑のカーテンや野菜の栽培等の活動についても併せて実践し、自然に生きる生命の力強さや命の尊さ、成長の喜びを実感させ、福島に生きる子どもだからこそ自然の豊かさ・美しさ・力強さを学び豊かに強く生き抜く力を培っていききたいと考え、プランを作成した。

## 2. 活動内容

- (1) 対象者 全学年 403 名 (1 年 55 名 2 年 67 名 3 年 57 名 4 年 70 名 5 年 76 名 6 年 78 名)  
保護者 100 名
- (2) 教科 生活科・理科・総合的な学習の時間・道徳・特別活動・学校行事・児童会 (委員会活動)
- (3) ねらい 生き物の飼育や植物栽培、自然体験を中心に据えた自然環境教育により、自然と共に生きる心豊かな子どもを育成する。
- (4) 活動の特色
- ① 小動物や植物の飼育や栽培、観察・解剖等の自然体験活動を通して成長の喜びや命の尊さを味わわせる。
  - ② 全校生対象であり、保護者参加型の実践を行うことにより、本校教育活動への理解・協力を促進する。
- (5) 活動時期および内容
- ①平成30年5月
- 理科3年「カブトムシを幼虫から育てよう」5月27日(月)  
一人一匹ずつ、ペットボトルでカブトムシの幼虫飼育を行う。福島県産幼虫を心配する保護者がまだいるため、長野県の高地で飼育しているものを取り寄せた。
- ②平成30年6月
- 理科5年「メダカのつがいに卵を産ませよう」6月7日(金)  
一人一匹ずつ、ペットボトルでメダカのつがいを飼育し、産卵の様子を観察した。
  - 生活科2年「ザリガニを飼育しよう」6月4日(月)  
2年生が一人一匹ずつ、ペットボトルでザリガニを飼育し、脱皮の様子を観察した。
  - 特別活動5年 「放射線講座」6月21日(木) いわき明星大学特任教授 石川哲夫先生
  - 理科6年「アユを解剖しよう」6月26日(火) 授業参観日  
アユを養殖しているヤナ場から生きたままのアユを運び、一人一匹ずつ生きたまま解剖し、動いている心臓や膨らんだ浮き袋、緑色の胆のうを観察した。授業参観日に実施し、解剖後は保護者と一緒に調理して大切な命をいただいた。
  - 緑のカーテンや野菜栽培 (フウセン蔓・アサガオ・ゴーヤ・ヘチマ・スイカ・キュウリ・ナス・トマト等)
- ③平成30年8月
- 1学期の小動物の飼育や栽培活動から児童個人のテーマをもって研究物や作文に取り組んだ。
- ④平成30年9月
- 校長会主催「理科作品展」 児童の研究物を理科作品展に出品し、多数入賞した。
  - ソニー子ども科学教育プログラム 児童が自然から学ぶ活動の様子をレポートし応募し、奨励校入賞。
  - JA 全農福島主催「福島発のキュウリビズ愛情込めてキュウリ栽培大作戦」にキュウリの栽培記録を応募し、テレビュー福島社長賞受賞。
  - 総合的な学習の時間4年「イモリを飼育しよう」 4年児童がつがいでイモリを飼育した。国語科の学習「学校自慢パンフレット」にイモリのいる学校として紹介した。
- ⑤平成30年11月
- 福島高専主催「子ども環境研究発表会」  
福島高専会場においてポスターセッションによる研究発表を行い、会長賞受賞。
  - 福島県作文コンクール  
2年生がザリガニを愛情込めて飼育した作文が特選に入賞。
- ⑥平成31年1月
- 貴財団の助成により児童が生き生きと活動し自然環境教育等のコンクールに多数入賞したことをHPや学校便りで紹介し、保護者や学校評議員対象学校評価を実施した結果、各項目とも昨年比5～12ポイントも上昇し、高評価を博した。

## 3 子どもたちへの効果

- (1) 自然の生き物とふれあうことを通して、本物の生き物の成長の喜びや生命力に触れ、子ども本来がもつ驚きや感動を引き出し、生命を尊重する心を育み、自然と共に生きる心豊かな子どもを育成することができた。
- (2) 保護者に理解と協力を求めて一緒に事業を行うことや、触れ合い活動をHPや学校便りで広く周知したことにより、子どもたちへの意欲が喚起され、家族ぐるみで自然とふれ合う姿が見られるようになった。

※ 貴財団の助成により今年度も多大な教育効果を上げることができたことを深く感謝申し上げます。